Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century
21世紀の外国語学習スタンダーズ

「日本語学習スタンダーズ」

National Standards in Foreign Language Education Project
外国語学習ナショナル・スタンダーズ プロジェクト

日本語版発行：国際交流基金日本語国際センター
翻訳者：聖田京子

Material from “Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century” is reproduced by permission of American Council on the Teaching of Foreign Languages, Inc. on behalf of the National Standards in Foreign Language Education Project, 6 Executive Plaza, Yonkers, NY 10701-6801
© 1999 National Standards in Foreign Language Education Project.

日本語学習スタンダーズ

全米日本語教師会（National Council of Secondary Teachers of Japanese、小中高を主とする教師会）及び 北米日本語学会 （Association of Teachers of Japanese）による共同プロジェクト

日本語ナショナル・スタンダーズの実行委員会（Task Force Committee）

Pamela Delfosse, Madison West High School, Madison, WI

Yumiko Guajardo, U.S. Air Force Academy, Colorado Springs, CO

Kimberly Jones, University of Arizona, Tempe, AZ

Yoko Kano, University of North Carolina at Wilmington, Wilmington, NC

Hiroko Kataoka (Chair), California State University, Long Beach/Japan Foundation and Language Center, Santa Monica, CA

Waunita Kinoshita, Urbana High School, Urbana, IL

Norman Masuda, Palo Alto High School, Palo Alto, CA

Toyoko Okawa, Punahou School, Honolulu, HI

Carrie Penning, East Hartford Glastonbury Magnet School, East Hartford, CT

Jessica Thurrott, Maloney Magnet School, Waterbury, CT

Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego, CA

Yasuko Ito Watt, Indiana University, Bloomington, IN

評価委員会（Board of Reviewers）

最終原稿にフィードバックを寄せて下さったメンバーは以下の通りです。コメントすべてが本書に取り入れられたわけではないこと、また、メンバーがスタンダーズの内容すべてに同意しているわけではないことをご了解下さい。

Marty Abbott
Fairfax County Public School, Falls Church, VA

Leslie Birkland
Lake Washington High School, Kirkland, WA

Yoshiko Brotherton
Clements High School, Fort Bend, TX

Anita Bruce
World Languages, Honolulu, HI

Yoshiko Elmer
Burges High School, El Paso, TX

Kyle Ennis
Aloha High School, Beaverton, OR

Fumiko Foard
Arizona State University, AZ

Lynette Fujimori
School Renewal Group, Honolulu, HI

Hiroko Furuyama
The Japan Foundation, Santa Monica, CA

Kyoko Hijirida
University of Hawaii, Honolulu, HI

Sonomi Ishida
Great Falls Elementary School, Fairfax, VA

Eleanor H. Jorden
Teacher Training Institute, Exchange: Japan, Ann Arbor, MI

Takuo Kinoshita
M.L. King Elementary School, Urbana, IL

Hiroyuki Kuno
Spencer Elementary School, Savannah, GA

Kimi Matsumoto
Los Alamitos High School, CA

Atsuko Morse
The College Preparatory School, Oakland, CA

Marci Muench
John F. Kennedy Middle School, Palm Beach, FL

Mari Noda
Ohio State University, Columbus, OH

Yoko Pusavat
California State University, Long Beach, CA

Charles Quinn
Ohio State University, Columbus, OH

Nobuyuki Sassa
Great Falls Elementary School, Fairfax, VA

Ann Sherif
Oberlin College, OH

Donald L. Spence
East Carolina University, Greenville, NC

Christopher St. Clair
Dr. Hornedo Middle School Lincoln Middle School, El Paso, TX

Chihiro K. Thomson
University of New South Wales, Australia

Mamiya Sahara Worland
Great Falls Elementary School, Fairfax, VA

学習シナリオ（Learning Scenarios）提供者

実行委員に加えて、下記の方々が学習シナリオを提供して下さいました。ここに感謝の意を表します。

Fumiko Foard, Arizona State University, Tempe, AZ

Lee Link, Madison-Oneida BOCES, Hamilton, NY

Sandra Lopez-Richter, Crestwood Middle School, FL

Kimi Matsumoto, Los Alamitos High School, CA

Teachers of Richmond School Japanese Magnet Program, Portland, OR

下記の方々には色々な面でご支援を頂きました。ここに謝意を表します。

Judy Brisbois, USAFA, Colorado Springs, CO

Hiroko Furuyama, The Japan Foundation and Language Center in Los Angeles, CA

Mufi & Gail Hannemann, Honolulu, HI

Arturo Guajardo, Colorado Springs, CO

Noriko Hara, Indiana University, IN

Kyoko Hijirida, University of Hawaii, Honolulu, HI

Akiko Kakutani, Earlham College, Richmond, IN

Earl K. Okawa, The Japan-America Society of Hawaii, Honolulu, HI

Laurel Rasplica Rodd, University of Colorado, CO

Susan Schmidt, ATJ, c/o University of Colorado, CO

Rebecca Still, Richmond Community High School, VA

Isao Tsujimoto and others, The Japan Foundation and Language Center in Los Angeles, CA

目　次

日本語学習スタンダーズ …… 1
はじめに …… 2
アメリカにおける日本語教育 …… 4
本ドキュメント（スタンダーズ）の使用法 …… 6
目標１　コミュニケーション（Communication）…… 8
目標２　文化（Cultures）…… 15
目標３　コネクション（Connections：つながり）…… 19
目標４　比較（Comparisons）…… 21
目標５　コミュニティー（Communities:地域社会）…… 25
学習シナリオ …… 29
赤い鳥　小鳥 …… 29
フード・ピラミッド …… 30
日本の家 …… 31
花見 …… 31
台風 …… 32
子供の童話プロジェクト …… 33
マンザナー（Manzanar）…… 35
日本人をもてなす…… 36
“街角” のインタビュー …… 37
お茶 …… 38
贈り物／テレホン・ショッピング …… 39

日本語学習スタンダーズ

目標１　コミュニケーション（Communication）

日本語でコミュニケーションを行う

スタンダード　1.1:　対話を通して他の人と情報のやりとり、感情の表出、意見の交換をする。

スタンダード　1.2:　様々な話題について、日本語で書かれたものや話し言葉を理解し、解釈する。

スタンダード　1.3:　様々な話題について、自分の考え、意見、及び情報を口頭で、あるいは書いて発表する。

目標２　文化（Cultures）

日本文化を理解し、知識を習得する

スタンダード　2.1:　日本人の習慣・慣習（practices）を学び、その背景（perspectives）について理解する。

スタンダード　2.2:　日本文化における文化的所産・産物（products）とその背景（perspectives） について理解する。

目標３　コネクション（Connections：つながり）

他の教科内容に関連づけ、情報を得る

スタンダード　3.1:　日本語を用いて他の教科分野の知識を習得・補強する。

スタンダード　3.2:　日本語及び日本文化を通して情報を得、特有な視点を認識する。

目標４　比較（Comparisons）

日本語と母語の比較により言語と文化への洞察力を養う

スタンダード　4.1:　日本語と母語を比較し、言語に関する理解を深める。

スタンダード　4.2:　日本文化と自己の文化を比較し、文化の概念を把握する。

目標５　コミュニティー（Communities：地域社会）

国内及び国外において多文化・多言語社会に参加する

スタンダード　5.1:　学んだ日本語を学校内外で使用する。

スタンダード　5.2:　人生を豊かにするために、日本語を使用し、生涯教育の一環として学習の継続を心がける。

はじめに

「日本語学習スタンダーズ」は、アメリカの K－16 レベル[訳注1]の日本語教育者の努力によってできあがったものである。アメリカにおける外国語学習ナショナル・スタンダーズプロジェクト（National Standards in Foreign Language Education Project）[訳注2]により発表された“Standards for Foreign Language Learning: Preparing for the 21st Century”（外国語学習スタンダーズ:21 世紀への準備）と題する出版書の一環で、米国における日本語教育部門をなすものである。

外国語学習スタンダーズを詳細に検討することによって、日本語の実行委員会は日本語教育における独自のニーズに合うように修正すべき点を決めることができた。その結果、日本語学習スタンダーズは外国語学習スタンダーズの優れた点を取り入れると共に、日本語教育独自の分野で問題となるような点には修正を加えることが可能となったのである。

「日本語学習スタンダーズ（以後、学習を略し、日本語スタンダーズと記す）」は「外国語学習スタンダーズ（以後、学習を略し、外国語スタンダーズと記す）」に沿ったものである。内容の解釈や効果的な活用については「外国語スタンダーズ」をよく理解していることが重要である。したがって、本書は、「外国語スタンダーズ」の教育理念や内容などがよく理解されていることが前提として書かれていることをご了解頂きたい。本書の構成上の基本原理は外国語スタンダーズのそれに沿うものであり、5 つの教育目標領域であるコミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティーは、ビジョンの中心となる柱である。それぞれの目標領域には学習者が習得すべき学習基準（standards）が示される。その目標内容に合うように指導するための到達指標サンプル（sample progress indicators）が付記されている。最後に、スタンダーズの内容が学習活動としてクラスで実践されるための学習シナリオ（learning scenarios、1 つのまとまった学習活動がストーリーとして書かれているもの）の例がいくつか示されている。

「日本語スタンダーズ」は様々なレベルを代表する教育者からなるチームで開発された教育基準である。幼稚園から大学まで（K－16）の一貫したプログラムを作成するのに、多くの地域を代表して、K－16 すなわち、小学校、中学、高校、大学の日本語教師が共に協力し合ったものである。日本語を母語とする教師と日本語を外国語とする教師たちもまた、それぞれの経験、洞察、意見などを述べあって互いに協力した。専門家たちによるこのような協力は結果的に、日本語教育分野における多様なニーズに応え得るものを生み出すことができた。

訳注1 キンダーガーテン（幼稚園）から 16 年生（大学４年生）レベル

訳注2 1983 年に ACTFL を中心に連邦政府からの支援を得て始められた外国語学習スタンダーズを開発・作成するプロジェクト

「日本語スタンダーズ」作成にあたっては、「外国語スタンダーズ」における各教育目標（goals）、指導基準（standards）、及び到達指標（progress indicator）などを注意深く調べ、評価し、必要に応じて修正を加えた。そして出来上がった日本語スタンダーズは、最終段階でフィードバックを求めるために、日本語教育分野で活躍する方々に配られた。寄せられたコメントは最終版にむけての改訂に大いに役立った。

学習シナリオはクラス実践を基にして作成されたもので、現場の先生たちにより生み出され、スタンダーズが実際のクラスで活用される例として提供された。「日本語スタンダーズ」の強み（strengths）は、このように、国をあげての教師たちによる貴重な貢献で出来上がったということである。

スタンダーズは教師と学習者のために作成されたものであるが、その効果については、クラスという壁をはるかに越えるものがある。すなわち、言語教育の計画に携わる教育行政の方々、父母、教育アドバイザー、他教科の先生たち、支援を行っている組織機関の人々に対しても、アメリカの教育の中での日本語教育のビジョンが提示できるのである。「外国語スタンダーズ」の基本になっている教育理念、及びその前提にある言語と文化に関する諸説に沿って、「日本語スタンダーズ」は開発、作成されたのである。

言葉とコミュニケーションは人間生活の基本であり、多民族国家であるアメリカは、国の内外において子ども達が多文化・多言語の社会環境に適応し、貢献できるよう教育しなければならない。子ども達は英語の能力を高めると共に、1 つ以上の外国語を習得する必要がある。英語を外国語とする子ども達は母語も伸ばさなければならない。

（“Standards for Foreign Language Learning: Preparing for the 21st Century” p.7）

日本語教育に携わる K－16 の全ての教師はこの上記のビジョンを支持すべきであろう。能力や背景の異なる学習者のニーズと興味を満たしてくれる日本語プログラムが開発され、採用されるのであれば、日本語を学ぶ生徒が恩恵を受け、教師も 1 つのアプローチに制限されることなく教育目標が達成できる。アプローチや教授法はクラスを構成するメンバー、学習者のニーズ、教師の予備知識、または個性により異なる。スタンダーズは学習目標及び目的の設定を助け、その達成に対しては、色々な方法のあることを確認するのに役立つと思われる。

アメリカにおける日本語教育

「外国語スタンダーズ」には、外国語を学ぶ事により得られる利点が指摘されている。母語についても、言語一般についても、よく理解できるようになるし、母国及び他の言語・文化に対する感受性も豊かになる。一般的な認識やコミュニケーション・スキルを深め、他の文化に接し、知識、情報も多く得られるようになる。しかも言語的・文化的に英語からかけ離れている日本語のような言語を学ぶ事で、学習者は特に自己の言語・文化とのギャップの大きさに驚くと同時に、それぞれの独自性にも気付くようになる。

外国語学習者が得るこのような恩恵に加えて、外国語に堪能なアメリカ人の増加は、世界の人々とのコミュニケーション能力や知識の向上につながり、従って、国家にも恩恵をもたらすものである。アジア及び環太平洋の国々の重要さが増し、日米関係の重要性が高まるにつれ、アメリカ人の日本語能力の向上は日本語を通してのみ得られる情報を得たり、日米相互の密度の高いコミュニケーションと理解をもたらす事につながるのである。

伝統的に、アメリカにおける日本語研究は学者や外交官などわずかな専門家に限られていたが、地球規模でアジアにおける日本の重要性の増大は、日本語・日本文化の知識が、いわゆる「日本エキスパート」だけでなく、いろいろな分野の人々にとっても役に立つものとなった。ビジネス、観光業、ジャーナリズム、科学、テクノロジー、人文科学系など、いろいろな分野で役立つことを意味する。実際、過去 15 年から 20 年の間は、この事実を裏付けるように、日本語を学ぶ学習者の数、その背景、また学習目的も大いに広がりを見せている。

今日、学生はいろいろな状況下で日本語を学んでいる。大学及び大学院における伝統的なプログラムのほかに、今や日本語教育は K－12、すなわち小、中、高校において行われ、コミュニティーカレッジ（community colleges）でも、継承日本語教育の学校でも行われ、さらにイマージョンプログラム[訳注3]、放課後クラス、遠隔教育、コンピュータによる独学プログラムなどでも日本語が学習されていて、実に多様である。例えば 1986 年から 1991 年までの間に、日本語を教えている高校は 200 校から 770 校以上に増えた（Jorden with Lambert, p.17）。プログラムの種類や内容が増えただけでなく、いろいろなタイプの学習者が日本語を学ぶようになったのである。もはや、日本語はエリートだけに学ばれる言語ではなくなった。

近い将来、ますます多くの学習者が日本語を勉強するようになるだろうし、日本語を選択する学習者の背景も一層多様さを増していくものと思われる。日本語の予備知識の全くない者、少しある者、かなりある者も日本語のクラスに入ってくるだろうし、継承日本語学習者として入ってくる者もいるかも知れない。すでに他の言語を学んだ後で日本語クラスに入る学習者もいよう。また、中学か高校

訳注3　毎日短時間、学習するプログラムやカリキュラムの多くを第二言語で集中的に行うプログラム

で日本語を始める者もいるかも知れない。あるいは、日本語を勉強した後、他の言語を勉強し、再び日本語に戻ってくるというケースもあろう。従って、学校はいろいろなレベルで、学習者を受け入れられるプログラムを準備しなければならない。

幼稚園から大学までの一貫した日本語プログラムがなくても、日本語の学習から得られる利点は多いと思われる。言語と文化を学ぶことに加えて、学習ストラテジー、高度な思考能力、幅広いものの見方・考え方なども学べる。

このような状況の下では、学習者に対して日本語教育に携わる者が、高い基準を設けるのは非常に重要なことである。高度なレベル維持の期待からのみ、日本語教育の質を向上させることが可能であり、かつ、学習者個人、及び国全体に対して、恩恵があたえられるような貢献ができるのである。教師にとって、目標領域、学習基準、到達指標などが述べられている本書が、学習者たちの様々な能力やニーズに合うカリキュラムを作るのに、役立つことと確信する。各学年レベルの到達指標サンプルを調べ、各自のクラスのニーズや能力に応じて採用し、ガイドとして利用して頂ければ幸いである。

日本語の特徴

日本語・日本文化のユニークさはアメリカの学習者にとっては、非常に興味深いものであると同時に、難しいものでもある。日本語を勉強することは、異なる言語・文化の構造を学び、それを駆使するスキルを伸ばすことを意味する。日本語を学習することにより、日本語の文字、生活習慣、芸術などが分かるようになり、日本語ができる者だけに与えられる職業に就く機会にも恵まれるようになる。西洋以外の文化に触れたことのないアメリカの学習者にとっては、日本語の勉強がアジアへの扉を開く機会となり、日系アメリカ人の学習者にとっては、祖先の文化的所産との出会いの場となる。日本語プログラムの作成や実践にあたっては、いかなるレベルであるにせよ、アメリカ人学習者にとっての日本語の特徴、そのユニークさや興味深さ、面白さを強調することが大切である。それと同時に、困難にぶつかることもあるということを理解させる必要がある。

さらに、アメリカで日本語を教える際に留意すべき点は、英語を母語とする者（英語話者）が日本語能力の高いレベルに到達するのにかかる時間である。The Foreign Service Institute of the State Department（アメリカ国務省外国語研修機関）の実験例によると、日本語のようなカテゴリー4 に所属する言語[訳注4]は、高度レベルに到達するのに、一日中勉強して、88 週間かかったと記録されている。それに対して、スペイン語、フランス語のようなカテゴリー１の言語は、同じような高度なレベルに到達するのに、24 週間しかかかっていない。従って、日本語教育に携わる者は、学習者がヨーロッパ系の言語と同じような速度で日本語を習得することは期待できない。

[訳注4] 日本語の他に、韓国語、ポルトガル語、ロシア語が含まれる

どうして英語話者が日本語を学ぶのにそのように時間がかかるのかということには種々の理由が考えられる。まず、言語的にも文化的にも両者は非常にかけ離れた距離にあり、両語が語源的に全く異なる言語であるということがある。文法構造では、日本語では動詞が文末にくること、前置詞ではなく、後置詞であること、さらに、修飾する関係従属節は名詞の後でなく前にくることなどが考えられる。しかしながら、日本語の音韻システムが割合単純であることと、また、英語の分かる人には親しみのある英語からの借用語があることなどは、前述の日本語の難しさを幾分緩和してくれている。

言語的遠距離に加えて、日本とアメリカの文化的距離もまた日本語学習の難しさの原因となっている。コミュニケーションにおける基本的な機能、すなわち、他者へのものごとの依頼の仕方、他者の意見に対する反対の仕方、招待の仕方などの表現は、日本の社会においてはアメリカ社会とは異なった表現がとられる。会話文を、単に英語から日本語に、語彙と文法だけで訳しても適切な日本語の会話とはならない。学習者は言語使用上大切である、会話を交わす者同士の社会的関係を把握しなければならない。例えば、会話の内容が同じであっても、社会的要素である性別、年齢、地位、対話者間の親しさの度合いなどにより、言語表現の形が異なってくる（あるいは、言語表現を全く要しない場合もある）。

両国の言語的・文化的距離だけが日本語習得に要する時間を増大させているのではなく、日本語の書き言葉もまたそれに輪をかけたように問題なのである。日本人のために書かれたものが読めるようになるには、学習者は 2 つの異なる仮名の書き方と約二千字の漢字を習得しなければならない。しかもその漢字のほとんどは読み方が異なり、意味も違うことがあるので、相当な努力が必要とされる。言葉が話せることは、読んだり、書いたりできることとは限らないと言われるが、話し言葉と書き言葉の差は、日本語の場合には特に大きいと言える。

本ドキュメント（スタンダーズ）の使用法

本スタンダーズは、アメリカで日本語学習が幼稚園から行われることを願って準備されたものである。しかし、現在このような機会はほとんどの地域には存在しないので、教師や学校経営者は、スタンダーズを現在あるプログラムに合わせて採用しながら、スタンダーズが将来に向けて充分に達成できるように、その可能性をさぐるという立場に立つことが必要である。幼稚園で日本語教育を始めていない学校では、現在提供されているプログラムの学習レベルに合わせてスタンダーズを取り入れるようにすることが望ましい。

目標領域における学習到達指標は 4 年生、8 年生、12 年生、16 年生に示されている。教師はそれぞれの学年指標を自分のプログラムの学習者の立場に応用できる。例えば、4 年生の到達指標とされ

ている項目は、5 年生で日本語の学習をはじめるプログラムでは、8 年生の到達指標として採用できる。その場合には、生徒の年齢を配慮して採用すべきである。

経験上、効果ある理想的な言語学習とは毎日その学習言語に接することである。毎日学習言語に接する学習者やイマージョンプログラムやパーシャル・イマージョン（partial immersion）プログラムで学ぶ学習者は、理想的な言語学習環境にあると言える。それと比較して、授業が週に 2、3 回しかない場合や、週に何回か他のクラスから「取り出して（pull out）」短時間の授業を行なったり、学校側の経済的理由から半年だけのプログラムだったりすると、それらの学習者には、前者と同じ習得速度を期待することはもちろんできない。

学習者の言語習得度に影響を及ぼす他の要素としては、クラスで日本語が使われる量、教授法、教師の言語能力などがある。このスタンダーズは、クラスで教える際には、できるだけ日本語を使う事を奨励している。しかしながら、学習者の学習言語のレベルを越えた説明の場合などは、英語を使う必要もあり、その点については、本書の中でも述べてある。

本スタンダーズは、設定された目標領域に到達するのに役立つ学習活動を取り上げ、タスクを奨励しているが、決してカリキュラムやコースの内容を決めるものではない。日本語のユニークさを強調するのに適した学習シナリオを幾つか含めてあるが、それらは、各自のクラスの状況下で、学習者のニーズに合わせて取り入れられるように、例として提供されているものである。

テクノロジー

本書のガイドラインを実践に移すに際し、教師はテクノロジーの向上がクラスにおける目標、目的の到達を速め、内容を豊かにする可能性があることを留意すべきである。今やテクノロジーの進歩と変化が実に速い時代である。例えば、書くことで日本人とコミュニケーションすることは、かつてないほど易しく、今は日本語による電子メールで直ちに実現できる。現在の子ども達は、そのような変化をすぐに受け入れるし、むしろ最新テクノロジーを勉強に応用したがっているのである。教師はマーケットに出る新製品をすべて取り入れる必要はないが、テクノロジーの進歩に伴う変化の動向は知っておく必要がある。

目標１　コミュニケーション (Communication)

日本語でコミュニケーションを行う

日本語と英語の文法構造、語形、表記法の違いにより、日本語を学ぶ者はヨーロッパの言語を学ぶ者に比べ、より多くの困難にぶつかり、同等の目標を達成するのにも、多くの時間がかかる。その難しさは、日本語教師と学習者に、多くの事を示唆している。本項における到達指標（progress indicators）では、このような点が配慮されている。例えば、日本語の生教材をそのまま使うのは難しいので、内容を英語に頼る事もあり得る。また学習者の読むスキルを伸ばすためには、生教材も、特別に作成された補助教材も両方必要となる。それは、日本語につきものの多くの漢字とその使い方の複雑さゆえである。また、手書きで書かれた読み物教材や、いろいろな種類の文字（fonts）にもなじませておく必要がある。

日本語はまた表現上フォーマルなレベルや文体においても複雑である。学習者がどのような文体とフォーマル・レベルで話すかを決める時には、年齢に適したものでなければならない。例えば、幼稚園の先生が園児にいつも「です／ます」体を使うのは不自然であるが、日本語のレベルが進むにつれて、話し言葉と書き言葉は異なるということを徐々に認識させると共に両者のいろいろな文体にもなれさせる必要がある。

スタンダーズではコミュニケーション形態を３つに分けている。即ち、相互の情報のやり取り（interpersonal）、情報の解釈 （interpretive）、発表 （presentational）の３様式である。日本語で対人コミュニケーションを学ぶのには、特に敬語やスピーチ・レベル、フォーマルかインフォーマルかの別などに注意する必要がある。

日本語は平仮名と片仮名だけでも書くことができる、という事実は基礎的な読み書きが学習のかなり早い段階でできることを意味する。けれども、文字によってコミュニケーションするということは、日本語特有の書き言葉の習得が必要であり、それは往々にして日本語学習上チャレンジである。ライティング・スキルとリーディング・スキルが要求される「書いて発表するコミュニケーション」の習得は、漢字とその使い方の複雑さのため、時間をかけて徐々になされていく。

発表型コミュニケーションは、フォーマルなスピーチで使われる特別な決まり文句から、起承転結の作文／論文構成にも注目する必要がある。漢字や表記に関することももちろん習得しなければならない。

聞いたり、読んだりという解釈のコミュニケーション・スキルを伸ばすには、いろいろな事を認識する一歩進んだ勉強が要求される。例えば、聞き手や読み手は、言葉の丁寧さ、またはフォーマルさのレベルを識別すると共にその意図するところが解ること、例えば片仮名が強調の目的にも使われることなどを学ぶ必要がある。

スタンダード　1.1

対話を通して他の人と情報のやりとり、感情の表出、意見の交換をする。

４年生の到達指標サンプル

＊　生徒は学齢に適したクラスでの学習及び文化的活動に参加するのに使われる簡単な日本語の指示（起立・礼、見て／聞いて／すわって下さい、ジャンケンポン、折り紙作りなど）が分かり、言うこともできる。

＊　日常の簡単な挨拶ややり取り、家族、学校の事、手紙、電子メール、テープやビデオによる個人的なお祝いなどのトピックについて質問したり、答えたりすることができる（いつ、どこ、だれ、何時、何人）。

＊　日常的で身近な物、トピック、人物、イベントなどについて、好きか嫌いかを言い合う。（日本語が好き、野菜がきらい）

＊　人物や日本文化の具体的・実体的な産物（tangible products）（相撲とり、きもの、コンピュータゲーム、伝統的／今風の食べ物）などについて、お互いに描写しあう。

＊　教室内外で出会った時や別れる際のあいさつなどが適切な動作をともなって表現できる事（お辞儀をしながら、お早うございます。手を振りながら、さようなら）。

＊　名前、誕生日、住所、学年、国籍などを含め、自己紹介ができること。

＊　分からないことやはっきりしない場合に、適切に対処できること（何ですか。わからない、え？）。

８年生の到達指標サンプル

＊　生徒は学齢に適したクラスの学習や文化的活動（運動会、学芸会）に参加するのに指示を与えたり、指示に従ったりできる。質問したり、説明したりすることができる。

＊　個人的イベントや思い出に残るような体験（語学キャンプ[訳注5]、日本食レストランでの食事）の話をしたり、学校で勉強する教科の話を友だちや地域社会の日本人たちと話したりする。

＊　イベント、経験、学校などに関することについて、比較して意見や好みを述べたりする（てんぷらの方がおいしかった、… と思う。）

＊　品物、サービス、インフォーメーション等に関して、口頭または書面で、いろいろと聞く事ができる（それお願いします、見せて下さい）。

[訳注5] 学習外国語を使う目的での合宿生活

＊　クラスで、または小さいグループで、学校あるいはコミュニティーに関係した活動（学校主催のカーニバルに日本語ブースを企画する、老人ホームで日本の歌を歌う）について、討議したり、提案したり、実践したりできる。

＊　自分の言いたい事が十分伝えられない時には、コミュニケーション・ストラテジー（他の言葉で言い直してみる、ジェスチャーをする）を使う。

12 年生の到達指標サンプル

＊　興味のある日本の地域社会のトピックについて、あるいは勉強している他の教科に関する話題について、口頭で話し合ったり、書いたりしてみる（長野オリンピック、プリクラ、マンガ）。

＊　グループ活動を通して学校や地域社会に関連する問題に対して、解決策を提案する。

＊　発表された日本語での簡単な読み物や、録音されたテープ、ビデオなどの小作品に対する自分の感想などを話し合う。

＊　興味のある話題（塾、アルバイト、日本のポップ歌手）について、いろいろな資料（調査、インタビュー、インターネット、図表、ビデオ、書物）から情報を集める。

＊　収集した情報について、日本語コミュニティーの方々や友だちと適切な態度で意見の交換をする（…と思う、…と思いますけど...）。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　日本の社会で重要な問題や他の教科で学んだ事柄（高齢化社会、第２次世界大戦）について口頭で、あるいは論文を書いて発表する。

＊　グループで自分達の地域社会と日本の社会で問題となっているトピック（移民労働者、環境問題）について、その解決策を提案する。

＊　友人や日本人と、小論文や文学的作品について、意見や感想を述べ合う。

＊　現代の社会的及び歴史的問題に関する様々なトピック（いじめ、雇用機会均等、明治維新）について、同僚や日本人と意見や個人的見解を述べ合い、議論したり賛成や支持を表明したりする。会話を行うに当たって、様々な話題を加えたり、追求したり、または変えたりするタイミングなどの適切さについて理解する。（ビジネス交渉において具体的な取り決めにはいるところ、結婚式では避ける話題）。

スタンダード　1.2

様々な話題について日本語で書かれたものや話し言葉を理解し、解釈する。

４年生の到達指標サンプル

＊　学齢に適した個人、家族その他の物語や、絵などの視覚教材を伴った物語（紙芝居、絵本、ビデオ）を聞いて、主要点を把握、理解する。

＊　絵入りの子ども向けの物語（children's literature）を聞いて、主人公（かぐや姫、桃太郎、アンパンマン、ドラえもん）を見分け、物語のあらすじを理解する。

＊　身近な物や人物について描写されたものを聞いたり読んだりして、それが何なのか、誰なのかを判断する（私はだれでしょう？ゲーム、20 のとびら）。

＊　決まり文句の表現や簡単なクラス・アナウンスメント、メモ、学級・学校活動などについてのリストなどが理解できる（本日のクラス会の議題、朝の学校放送 による伝達事項）。

＊　学齢に適したメディア、例えばイラストつきの本（絵本、マンガ）、ポスター、広告、コンピュータゲーム（日本語ゲームボーイのソフトウェア）などの内容の主な意味が分かる。

＊　話し言葉を理解するのに、手がかりとなるジェスチャー、イントネーション、その他の視覚や音による合図などが分かる（ジェスチャーをしながら「おいで」）。

８年生の到達指標サンプル

＊　身近に存在する人物や物（昭和天皇、野茂英雄のように歴史上または現存の人物、それから、新幹線のような乗り物）、あるいは、他の学科に関係するものについて、口頭での発表を聞いたり、書かれたものを読んだりして、理解する。

＊　家族、学校行事、お祝い（行事案内、誕生日の招待状）などに関する簡単で個人的なメモを読んで理解できる。

＊　視覚メディアを見ながら、またはプレゼンテーション（ show-and-tell [訳注6]）を聞いて、何について話されているか（趣味、友人、テレビ・プログラムなど）、主な内容が分かる。

＊　ほかで得た知識や、他の学科領域（科学、社会科）で習ったこと（天気予報、ゴミ収集スケジュール）について、聞いて理解でき、読んでも内容が分かる。

＊　「ひらがなタイムズ」のように、分かりやすく書かれた読み物の身近なトピックについて、主な内容が把握できる。

＊　読み物の文脈から推して、習っていない漢字やカタカナ語、単語などの意味を推測する能力を見せ始める。

[訳注6] ものを見せて、それについて説明する

12 年生の到達指標サンプル

＊　いろいろなメディア（映画、テレビ、ラジオなどのプログラム、CD）や日本語コミュニティーに関する興味ある話題について（目下開催されているイベント、ポップカルチャー）、大体の内容が分かる。

＊　新聞（朝日新聞、ニューヨーク読売）、雑誌（日本語ジャーナル）、電子メール、あるいは、他の資料から引用した読み物の内容が大体理解できる。

＊　いろいろなジャンルの文学（ショート・ショート、俳句、落語、演劇）から採用された作品の概要が分かり、主な漢字が判読できる。

＊　書き言葉における個人的書簡とビジネス文書の違い、話し言葉における内と外、すなわち家族と見知らぬ人に対する言葉遣いの違い、さらにフォーマルな場合とインフォーマルな場合における違いにも理解を示しはじめている。

＊　まだ習っていない漢字や熟語、語彙などを前後の状況から推測する能力の向上がみられる。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　日本の社会における現在または過去に起こった問題（バブル崩壊、女性問題、オウム真理教）や、ほかの学科で学んだトピックなどについての講演、録音された討論などの重要な点及び詳細が理解できる。

＊　日本人にとって、現在または歴史上の重要なトピック（少年犯罪、臓器移植、女工哀史）について、電子メディア及び正規のノンフィクション（新聞、雑誌、ウェブページ）の主な特徴を理解する。

＊　選定された文学作品（『竹取物語』、『吾輩は猫である』、『キッチン』、『サラダ記念日』）のテキストにて、物語の主な筋（plot）、従となる筋、人物とその描写、役割、その他の重要な要素を分析する。

＊　フォーマルとインフォーマルな状況における書き言葉、話し言葉において、意味のニュアンスの違いがよく理解できるようになる（拒否、不平の間接的な表現の仕方とか、同じ意味をもつ漢語と和語の選択の仕方など）。

＊　文学作品のジャンル（新体詩、小説）や視覚芸術（俳画、歌舞伎）などを含む表現豊かな日本文化における文化的意味の理解を深める。

スタンダード　1.3

様々な話題について、自分の考え、意見及び情報などを口頭で、あるいは書いて発表する。

４年生の到達指標サンプル

＊　学習者の身近に存在する人物、活動、イベントなどについて、説明や描写を前もって準備しておき、クラスで発表する。

＊　日常身近に存在する人物、活動、イベント（見学、夏休みなど）について、簡単に口頭で発表する。

＊　身ぶりや動作をしながら、日本の子ども達に親しまれている歌（「結んで開いて」、「げんこつ山のたぬきさん」、「咲いた咲いた」）を歌ったり、短い話（日本昔話）をしたり、あるいは詩などを発表する。

＊　フォーマットに従って書いたグリーティング・カード（年賀状）や短い手紙、または、テープやビデオをペンパルや他の人々（クラスメート、家族、校長先生、PTA、教育委員）に送る。

8 年生の到達指標サンプル

＊　自分たちの文化所産（products）や生活習慣・慣習（ポップミュージック、感謝祭、独立記念日）を日本語コミュニティーの同年輩の少年少女たちに口頭で、あるいは書いて発表する。

＊　学校や地域の行事で、寸劇、スキット、詩や逸話の暗唱などを発表したり、歌を披露したりする。

＊　興味のあるトピックについて、（学校紹介や校内ニュースなどの）録音されたテープやビデオをクラスや日本語コミュニティーで紹介し合う。

＊　ストーリーや自分の経験（家族旅行、見学）に関するレポートを書き、または興味のある他の科目（理科の実験レポート）について、クラスや日本語コミュニティーの仲間に紹介する。

＊　適切な作品や翻訳された文学作品など（日本語版『窓際のトットちゃん』、“ Rising Sons and Daughters”、翻訳版『坊ちゃん』）における主題テーマ、メイン・アイデア、及び人物について、口頭及び文章の両方でまとめる。

＊　自分、家族、及び友だちの日常活動について、「交換日記」の形式で、口頭及び文章の両方でまとめる。

12 年生の到達指標サンプル

＊　自己の経験、イベント、または他の科目について、レポートを書き、クラスや日本語コミュニティーで発表する（夏休み、地域・ニュース・ストーリー、科学の実験結果）。

＊　原作、あるいは、教材として採用された文学作品の一部について、ストーリーの筋及び登場人物の要約を口頭または文章でまとめてみる（芥川龍之介や星新一の短編、『今昔物語』）。

＊　自己の経験、テーマ、思考を基に、または、日本語コミュニティーに見られる物の見方・考え方に接した体験などを通して、物語や詩、寸劇、スキットを創作する（根性、本音とたてまえ、甘え、恩）。

＊　日本語コミュニティーで一般的に読まれている詩、演劇から抜粋された場面、ショート・ストーリーなどを暗唱する（『雨ニモマケズ』、阿倍公房著『友達』、『赤穂浪士』）。

＊　ポップカルチャー作品（マンガ（Manga）、テレビドラマ、アニメ映画）の内容を要約し、日本語話者に紹介・説明する。

＊　学生新聞･雑誌などに投稿する手紙や、興味のあるトピックに関する記事を書く。

＊　興味のある問題や日本語コミュニティーの問題（帰国子女、嫌煙権、少年犯罪）に関する調査結果を発表する。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　演劇における場面、詩、あるいは他の学科（世界史、地理、芸術、数学）に関連したトピックを選んで、物語の一部を演じる。

＊　演劇のシーン、詩の朗読、または、日本語コミュニティーの人々に親しまれている本の抜粋（三島由紀夫著『鹿鳴館』、村上春樹の短編小説、歌舞伎、狂言、和歌）から選んで、演出する。

＊　表現豊かな日本文化、文学作品、芸術（浮世絵、陶芸、書道）、または、ポップカルチャー（アニメ、ポップミュージック、映画）より、作品を選択し、分析する。

＊　日本人のために書かれた記事や記録書の内容を要約し、日本語コミュニティーの人々と電子メールで討論する。

＊　現代社会における種々の問題（湾岸戦争、宗教カルト、 地球温暖化、貿易摩擦）について、日米両地域の人々の考え方や意見を調査し、それに基づいて分析する。

目標２　文化 (Cultures)

日本文化を理解し、知識を習得する

日本文化にはユニークで興味深い面が多い。日本語学習者は伝統文化及びモダン文化の両方を学ぶ必要がある。

スタンダーズは人々の生活習慣・慣習（practices）、文化的所産・産物（products）、及びその背景（perspectives）[訳注7]という 3 つの p 面からのレンズを通して、文化という領域を考察する。年末のお歳暮（the products）を例に取ると、顧客や上司、教師、医者、親戚、仲人にお歳暮を贈るという習慣は、典型的な日本人の考え方を反映している。すなわち、世話になった方々との良好な関係を末永く維持するために、受けた恩は年内に返すとの考え方が、習慣の背景にある。なおギフトには、海苔、サラダオイル、石鹸などの実用品が用いられる。

スタンダード　2.1

日本人の習慣・慣習とその背景との関係について理解する。

４年生の到達指標サンプル

＊　学校、家庭、コミュニティーなどにおける簡単な行動様式（給食、学校の清掃、親戚、拡大家族（extended family）、隣組子供会）について、観察したり、確認したり、話し合ったりする。（英語の使用が必要）

＊　挨拶をしたり、許可をもらったり、クラス内での普通の対話を適切なジェスチャーを交えて表現する（授業中に水を飲みに行ったり、お手洗いに行ったりするとき、先生に許可をもらう、さようなら、おいでなどのジェスチャーをする、お辞儀）。

＊　年齢に適した文化的アクティビティーをする。例えば、ゲーム（ジャンケンポン）、運動会、歌、祝祭日（子供の日、七夕）、物語（紙芝居 ― 日本語で話を聞くか、英語で動作をする）、演劇など。

＊　年齢にふさわしいレベルで、日本語使用の際におけるフォーマルとインフォーマルの差異に気付く。（おはよう vs おはようございます）。

＊　メディア、絵画、記事などの翻訳されたものを通して、日本の同世代の子ども達の日常生活の様子を知る。

[訳注7] 背後にある人々の物の見方・考え方や価値観を含めた展望、文化背景

8 年生の到達指標サンプル

＊　日本における同世代特有の行動様式（ファッション意識、同性同士が手をつなぐ）を観察し、討論する。（英語の使用が必要）

＊　日常生活で、友人、クラスメート、家族、先生、大人との交流における際の言語表現、非言語表現について観察し、かつ、練習する（フォーマル対インフォーマル、及び、スピーチ・レベルを適切に設定し、様々な身ぶりとお辞儀をする）。

＊　ゲーム、スポーツ（運動会）、放課後活動（クラブ、塾）、娯楽（コンピュータゲーム）、勉強（クラス内の態度、家庭学習の習慣）など、年齢にふさわしい文化的アクティビティーについて、学び、できたら観察し、参加する。

12 年生の到達指標サンプル

＊　様々な文化的状況設定で、仲間または大人によって使用される（同年齢の仲間、異なる年齢間、上司）適切な言語及び非言語表現について観察し、練習する。

＊　年齢に応じたゲーム、スポーツ、放課後の活動（マクドナルド「マクド」に群れる）、クラブ、娯楽（映画、ポップミュージック、カラオケボックス）、勉強などに見られる、文化に関連する様々な生活習慣について知識を深め、可能であればそれらの活動に参加する。

＊　日本社会一般に見られる様々な行動様式、及びインタラクション（interaction）（名刺交換、贈り物、デート、お風呂、旅行）について認識し、分析し、討論する。

＊　日本社会の様々な状況で見られる社会的に承認された行動様式と、その文化的背景にある考え方・価値観との関係について認識し、調査し、討論する（個人的な質問をする傾向、物理的･心理的距離感覚、身体の生理的現象を話題にすることの限度（matter-of-factness about body and bodily functions）。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　様々な社会的／文化的状況を想定し、それぞれの状況にふさわしい言語的表現及び非言語的表現（適切な身体的表現（body language）の使用、内と外のメンバー間における言語的表現区別の使い分け）を用いる。

＊　日本の文化的状況の下で、文化的背景と社会的に承認されている行動様式（遠慮を示す、コンセンサスを築く、贈り物をする）とのつながりについて分析し、討論し、その理解を実践をもって示す。

＊　ゲーム、スポーツ、クラブ活動、娯楽、勉強などにおける、日本人の文化的背景と生活習慣との関係について、分析し、評価する（アルバイト、クラブでの先輩・後輩の関係、マージャン、喫茶店）。

スタンダード 2.2

日本文化における文化的所産・産物（products）とその背景について理解する。

４年生の到達指標サンプル

＊ おもちゃ、着物、家屋、食物など具体的にみられる文化的産物（凧、変圧器、学校の制服、浴衣、畳、卵焼き）を見つけ、観察する。

＊ 日本語コミュニティーの同年代の子ども達に作られた、または親しまれている芸術（習字）、踊り（盆踊り）、児童文学作品などに見られる表現豊かな日本文化について認識し、経験する。あるいは、英語で読む。

＊ 日本語コミュニティーの同年代の子ども達によって作られた、または、親しまれてきた手工芸品、図画などを見つけ出し、鑑賞し、話し合い、そして、実際に作品を作ってみる（てるてる坊主、母の日の絵画）。（英語の使用が必要）

＊ 日常生活、四季の行事やお祭りに使用される文化的所産を、観察し、使ったり、作ったりして体験する（箸を使う、もちをつく、鯉のぼりを作る）。

８年生の到達指標サンプル

＊ 伝統的及び現代における表現豊かな日本文化所産、例えば、工芸品（プラモデル、刺繍）、文芸、ビジュアル芸術、鑑賞芸術（俳句、習字、日本舞踊）について、読んだり、聞いたり、観察したり、または、実際にやってみる。

＊ 自分の家、コミュニティー、またはメディアで見つけられる実用的な日本製品（スポーツ用具、家庭用品、器具、食物、衣類）を探し出し、認識し、その用途を研究する。

＊ 現在学習中の文化的所産（年越しそば、鯉のぼり）について、認識し、テーマや考え方など文化的背景について討論する。

12 年生の到達指標サンプル

＊ 工芸品、種々の文学的ジャンル（literary genres）[訳注8]からの抜粋（日本語または英語の翻訳で）、視覚的または鑑賞芸術（刀、習字、墨絵、歌舞伎、能）などを含む表現豊かな文化的所産・産物について、討論し、分析する。

＊ 学習中の文化的所産・産物（折り紙の重要性と起原、マンガ／アニメの人気性、ポップソングのテーマ）について、認識し、テーマや概念、文化背景に関して簡単な分析を行う。

[訳注8] 書きことばの文体・種類のことで、小説、日記、随筆、詩などがある。

＊　日本文化について、文化的所産・産物と習慣、及びその背後に存在するものとの関係について、理解してきたことを実践で示す（お土産、名刺交換、クリスマスケーキ、門松）。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　社会、宗教、経済、政治上の制度（同窓会、町内会、寺、神社、新興宗教、東京証券取引所、政治政党と国会、デパート）のような無形文化所産について確認し、討論し、分析する。更に、それらの団体、あるいは制度と日本文化の背景の関係について考察する。

＊　日本の表現豊かな様々な芸術（建築、庭園、ファッションデザイン、織物デザイン、製紙）と、文芸ジャンル（歌物語、随筆、私小説、翻訳小説）について体験し、討論し、分析する。

＊　テーマ、思考、及び文化的背景を一段と複雑な文化所産と関連づけて確認し、分析する（日常生活における宗教の役割、伝統芸術とポップカルチャーとの結びつき、正式な祭典と着物の役割）。

＊　日本文化における生活習慣と文化所産、及び文化背景の関係について調査研究する。

目標 3　コネクション（Connections：つながり）

他の教科内容に関連づけ、情報を得る

新しい展望と教育方法は、日本語の学習に他の教科の内容を組み込むことを可能にしている。日本語の授業に他の学問の学習事項を加えることには、多くの利点がある。学習者の年齢にふさわしく、かつ、学習言語レベルにも適切さを配慮する必要があるので、教師は情報源として、英語の教材が必要になる。さらに、他の学問分野の教師とも、科目の内容について密に連絡を取りあう必要があるだろう。

スタンダード　3.1

日本語を用いて他の教科分野の知識を習得・補強する。

4 年生の到達指標サンプル

＊　数学におけるメートル法測定、気象、植物、地理的特徴など、他の学科で学んだ語彙、及び基本的な概念についての理解を日本語で示す。

８年生の到達指標サンプル

＊　学校で履修する学科に関するトピック、例えば、地理的特徴、歴史的事実、数学の問題、科学的情報などについて日本語で話す。

＊　他の学科で学習しているトピック（健康、環境、戦争と平和）に関連のある、短い日本語のビデオの内容を理解する。

＊　他の学科のクラスで勉強しているトピック（栄養学、コミュニティー、交通手段）について、口頭、または、簡単な文章にして、日本語で発表する。

12 年生の到達指標サンプル

＊　他の学科におけるトピック、例えば、政治的、または歴史的事件、世界的な健康に関する問題、環境問題など、について日本語で簡単に討論する。

＊　他の学科で学習しているトピック（気候の変化、政府の構造、公衆衛生）について、日本語で書かれた資料を調べ、情報を得る。

＊　日本語クラスでのアクティビティー（理想のコミュニティーをデザインする、ヘルシー・ライフへのアドバイス集を作る）を仕上げるのに必要な情報を、他の関連学科より得る。

＊　他の学科で学習しているトピック（世界史、生物、音楽鑑賞、芸術史）について、口頭または文書で情報を交換する。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　他の学科における、概念及び人文科学、科学、またはテクノロジーにおける問題のトピック（テクノロジー向上の影響、環境問題、比較文学）について、日本語で討論する。

＊　他の学科で研究している課題（高齢者の待遇、舞台演技の種類、政治哲学）について、日本語で書かれた種々の資料から情報を得る。

＊　他のコースで勉強中の様々なトピックについて、正式な場で、意見を交換したり、同意の支持を表明したり、討論したりする。

スタンダード　3.2

日本語及び日本文化を通して情報を得、その特有な視点を認識する。

4 年生の到達指標サンプル

＊　学習者の年齢にふさわしい短い物語、詩、歌、または内容の関連した生教材（content-related materials）（地域の地図、仮名で書かれた歌の単語、マンガ）について、読んだり、見たり、聞いたり、質問したり、答えたりする。

8 年生の到達指標サンプル

＊　学習者の年齢に適した日本人のために書かれた教材／資料について、読んだり、聞いたり、見たり、話したりする。そして、日本人特有の視点、及び、生活習慣を認識する。

12 年生の到達指標サンプル

＊　個人的興味、または以前に取り上げたことのあるトピックについて、クラス用教材及び同年代の日本人のために書かれた資料を使って、レポートを準備する。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　個人的興味または以前に取り上げたことのあるトピックを選んで、それに関する種々の日本語の資料を使用して、レポートを準備する。さらに、同じトピックに関する内容を、英語で書かれた資料の内容と比較する。

目標４　比較（Comparisons）

日本語と母語の比較により言語と文化への洞察力を養う

すべての文化には独自の特徴が見られる。その文化より生まれた言語もまた同様にそれぞれ独特な性格を持っている。異なる文化・言語間の比較は学習者の言語的意識や文化的理解を育むのに役立つ。日本には、英語からの借用語を用いたり、アメリカの生活習慣や文化的所産にあこがれを抱いたり、またその一方で古い伝統的な言葉や生活習慣を保持しようとする根強い傾向が見られる。このような現象は、言語・文化間の比較やディスカッションの過程で深い興味を与えるにちがいない。日本語・日本文化との相違点の存在で、日本語学習を楽しいものに感じる一方で、学習者はまた比較することを通して、日本と自国の言語・文化における多くの類似点についても観察、理解できるようになるであろう。

スタンダード　4.1

日本語と母語を比較し、言語に関する理解を深める

4 年生の到達指標サンプル

＊　借用語は、多くの言語に見られる現象である。英語から日本語に借用された言葉の例（アイスクリーム、ハンバーガー、バス、ジーンズ）、及び他の言語からの借用例（パン、ズボン、カステラ、クロワッサン、カルタ）を見つけ出す。（英語の使用が必要）

＊　日本語と英語の語順が異なることを認識する（アイスクリームを食べる vs. I will eat ice cream）。

＊　日本語と英語には挨拶に使う言葉にフォーマルとインフォーマルの区別のあることを理解し、それを実際に使ってみる（ありがとう vs. ありがとうございます。thanks vs. thank you）。

＊　日本語の三種類の表記とその使用法、及びローマ字の存在を認識する。

8 年生の到達指標サンプル

＊　慣用表現が英語（raining cats and dogs）にも日本語（顔が広い）にもあることを認識する。

＊　パン、カラオケ、ツナミなどの借用語、及び、中国に由来する漢字の使用例に見られるように、歴史的、または現代においての日本語と他言語間に存在する交流の継続性について認識する。

＊　英語と日本語における敬意及び身分の差異を示す表現法について理解する。

＊　言語には重要な音韻組織の特性があり、コミュニケーションのためにはそれを習得しなければならないことを認識する（びょういん vs. びよういん、おばあさん vs. おばさん）。

＊　方言、スラング、及び年齢、地位、性、の差異によるスピーチの役割を認識し、その特徴の文化的重要性について調査する（授受動詞(verbs of giving and receiving)、終助詞（sentence ending particles）、短縮形（contraction）、僕 vs. 私）。

12 年生の到達指標サンプル

＊　日本語及び他の言語において、意味と形に変化が起きている借用語があることを認識する（コンセント、トレーナー、リモコン、パソコン、台風、ひばち）。

＊　1 つの言語から他の言語に直訳できない語（words）， 句（phrases）， 慣用語（idioms）が存在することを理解する（社会人、懐かしい、腹が立つ、お疲れさま）。

＊　日本語と英語における、時間（time）、時制（tense）、アスペクト（aspect）等の言語的要素を比較し、分析する。さらに、言語が特定の意味を表現するために、いかに多様な形態（form）を使用するかについて推測する。

＊　日本語と他の言語における語順と意味の関係についてレポートする（大学のどこ vs. どこの大学）。

＊　日本語と英語の表記法について比較対照する。さらに、他の言語の表記に関しても調べ、その特質についてレポートする（符号文字（logographic）[訳注9]、表音文字（syllabic）、アルファベット）。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　日本語及び他の言語に関する言語的特徴を分析するスキルを習得する。

＊　日本語及び他の言語について、言語変化とその歴史的発展に関する認識を持つ。

＊　日本語及び他の言語において、地方や社会経済、あるいは性別や年齢により、コミュニケーションのスタイルが異なるということを理解する。

＊　日本語及び他の言語における話し言葉と書き言葉の差異を分析する（語彙の選択、短縮形、文章の長さ）。

＊　日本語及び他の言語に見られる私的（private）vs. 公的（public）、フォーマル vs. インフォーマル、叙述的（narrative）vs.　解説的（expository）など、さまざまなスタイルを分析する。

[訳注9] dollar を＄、cent を c と記すなど

スタンダード　4.2

日本文化と自己の文化を比較し、文化の概念を把握する。

4 年生の到達指標サンプル

＊　学習者は日本の同世代の子ども達と同様の興味や生活習慣を共有していることを認識する（ビデオゲーム、ファーストフード、衣服）。

＊　さまざまな社会的状況（学校、家族、コミュニティー）及び文化的状況（食事、入浴、手洗いのエチケット）における行動様式、またはインタラクションの仕方について、アメリカと日本の相違点と類似点について指摘する。（英語の使用が必要）

＊　ジェスチャーはコミュニケーションの大切な手段であること、また日本とアメリカではジェスチャーの仕方が異なる場合があることを認識する（さようならの手の振り方、自分自身を指す場合、握手とおじぎ）。

＊　日本とアメリカの具体的な文化的産物（玩具、衣服、家屋、食物）について、比較対比する。

＊　日本とアメリカの抽象的な文化的所産・産物（童謡、児童文学の抜粋、ゲーム、祝祭日）について比較する。

8 年生の到達指標サンプル

＊　日本とアメリカにおける友人、クラスメート、家族、先生との間の交流における言語、及び非言語行動について比較する（抱き合う、キスする、手をつなぐ、おじぎする、愛情の表現、フォーマルのレベルにおける差異、あいづち）。

＊　日本とアメリカにおける日常生活の活動を比較することにより、学習者自身もある文化の一員であることを認識する（学習時間、娯楽、保健衛生（personal hygiene routines））。

＊　日本及びアメリカの文化的所産・産物（大工用具、料理用器具、傘、スナック類）を分析することにより、どうしてある種の文化的所産・産物（スポーツ用品、家庭用品、道具、食物、衣類）が、特にある文化圏で考え出されたのか、または、重要視されるのかという理由などを推測する。

12 年生の到達指標サンプル

＊　日本文化における生活習慣とその背景にある思考・価値観との関係について調査し、それを自国の文化的状況と比較対比する（校則、入試、塾の役割、宮参り、墓参り）。

＊　日本における文化産物とその背景にある思考・価値観について考察し、自国の文化的状況と比較対比する（ポケベル、プリクラ）。

＊　日本語で話したり考えたりしている時のことを内省し、母語を使用している時と比較して、その時に意識し得る文化的差異について発表する（地位に対する意識、内と外のコミュニケーションに関する意識）。

＊　文化的背景にある世界観と生活習慣との関係について、日本とアメリカの生活習慣（ゲーム、スポーツ、娯楽、 祝祭日、学習習慣（study habits））のいくつかを分析し、仮説を立ててみる（応援団 vs. チアリーダー、お正月、家庭教師）。

＊　文化的背景と表現豊かな文化所産（伝統的・近代的なビジュアル、鑑賞芸術、文芸、建築）との関係を、日本とアメリカの文化所産のいくつかを分析して、仮説を立ててみる（文楽、連歌、ジュニア小説、ログハウス）。（英語の使用が必要）

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　格言や慣用的表現がいかに文化を反映しているかについて、日本語と日本文化及びアメリカの言語・文化の例を引用しつつ、考察する（石の上にも三年、出る釘は打たれる）。

＊　日本語と英語について、言葉と表現（豚のように食べる vs. eat like a horse）、及び声の抑揚（そうですか！ そうですか？）の意味のニュアンスを比較する。

＊　日本文化における生活習慣とその背景にある思考・世界観の関係を分析し、自国のそれと比較対照する（お見合い、新入社員教育、学生のライフスタイル、政治運動）。

＊　日本とアメリカにおける、文化的所産（教育組織、宗教団体、デパート、家屋のタイプ）と文化的背景との関係について分析し、討論する。

目標５　コミュニティー（Communities：地域社会）

国内及び国外において多文化・多言語社会に参加する

日本語はもはや日本語を母語とする日本人にのみ話されている言語ではない。日本の国以外で日本語を話す人々の数は毎年増え続けている。また、多くの日本人が外国を訪問している。つまり、日本語でコミュニケーションするのにわざわざ日本に出かける必要はない。日本語学習者はこのような状況を言語習得に利用すべきである。そして、日本語学習の主な目的は、習得した言語能力を活用して、地域社会に貢献することだと認識すべきである。学習者は父母[訳注10]、デイケアセンター（day care centers）、老人ホーム（senior citizen homes）などを訪ね、歌や踊りなどのプレゼンテーションを通して日本語学習の楽しさを共有できる。

スタンダード　5.1

学んだ**日本語を学校内外で使用する**

４年生の到達指標サンプル

＊　日本人と個人的に手紙や電子メールで交信したり、テープやビデオの交換をすることによりコミュニケーションを行う。

＊　日本語の能力を必要とする職業（旅行ガイド、翻訳家、日本語教師）を見つけ出す。

＊　想像上の遊び（imaginary play）に参加する（お店屋さんごっこ、ままごと）。

＊　日本語及び日本文化に関することを、友人、父母、コミュニティーのグループに英語または日本語で話す。

＊　友人、父母、コミュニティーのグループに見てもらう日本文化のトピックに関するイラストまたはポスターを作る。

＊　学校やコミュニティーの祝賀会や行事に出演する（歌を歌う、スキットをする、踊るなど）。

＊　クラス外で日本語を使って仲間と対話する、また日本語で情報を得て出題されたタスクを完成させる。

8 年生の到達指標サンプル

＊　さまざまな活動や行事（家族旅行、学校の休日、日常のアクティビティー）について、同年代の仲間に日本語で話したり、文章にしたりする。

訳注10 ここでは、アメリカに在住する日本人あるいは日系人の父母をさす。

＊　コミュニティーの人々に会って、職業上または個人生活の中で、どの程度日本語を使用しているかについて話を聞く。
＊　日本語及び日本文化に関する情報を他の人々に発表する（学生の集会で、地域の図書館で、またはショッピングモールで、老人ホームで）。
＊　学校やコミュニティーに役立つような活動に参加する（日本人訪問者を迎える、掲示版の展示を準備する）。
＊　他の人々に発表するストーリーやレポートを書き、それにイラストをつける。
＊　学校やコミュニティーの祝賀会や行事に出演する（スキット、歌、踊り、武道(martial arts)）。

12 年生の到達指標サンプル

＊　個人的に興味のある事柄や、地域社会及び世界の関心事について、日本語コミュニティーの人々と口頭で、あるいは文章に書いて、コミュニケーションする（廃棄物、交通手段（transportation）、地球温暖化、人口増加）。
＊　日本語及び日本文化の知識が役立つようなワーク・プロジェクト（school-to-work project）や職業調査に参加する（旅行会社、翻訳家、ビジネス・コンサルタント、法律家、航空乗務員）。日本文化または日本語学習に関するトピックについて調べるために、コミュニティーの情報を使用する（図書館、ウェブページ、インタビュー）。
＊　日本語及び日本の文化に関する情報を他の人々に発表する。
＊　学校やコミュニティーに役立つようなアクティビティーに参加する（日本語コミュニティーがいかにして社会問題に取り組んでいるのかに関する情報を集める、コミュニティーへの日本人訪問者を迎える、日本語での観光情報収集の準備を手伝う）。
＊　他の人々に発表するストーリーやレポートを書き、それにイラストをつける。
＊　学校やコミュニティーの祝賀会や行事に出演する（スキット、歌、踊り、寸劇、武道）。
＊　海外学習プログラムに参加し、他の人々とその体験を分かち合う。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　個人的、職業的に興味のあること、及びコミュニティーあるいは世界の関心事（化学兵器、環境問題、国際貿易）について、日本語コミュニティーの人々と口頭で、または文章に書いてコミュニケーションする。
＊　日本語及び日本文化の能力を必要とする職業について、インターンなどの機会を通して調査する。
＊　口頭でまたは文章に書いて、他の人々に情報を発表する。
＊　日本語の情報を利用してリサーチをする（書籍、ワールドワイド・ウェブ、ジャーナル、 ドキュメンタリー、新聞、 日本語話者）。

＊　コミュニティーの人々が日本語や文化を勉強するのを手伝う地域プログラム（outreach program）に参加する。（小学校で日本語指導の手伝いをする。地域のサービス組織やビジネスに役立つように、日本文化に関するプレゼンテーションを行う）。

＊　日本への海外学習プログラムに参加する。あるいは自分達の大学で学ぶ日本からの留学生を支援する。

スタンダード　5.2

人生を豊かにするために、日本語を使用し、生涯教育の一環として学習の継続を心がける。

4 年生の到達指標サンプル

＊　日本語のオーディオ、及び視覚資料（visual materials）を楽しむ（テレビ番組、子供のビデオ、絵本）。

＊　日本のスポーツ（武道）やゲーム（カルタ、すごろく）をする。

＊　日本への旅行を想定し、プランを立てる（訪問地、交通手段、観光するところ）。

＊　日本文化の行事や社会的な催し（ 七五三 、 七夕、 盆踊り ）を、メディアを通して見たり、参加したりする。

＊　日本の音楽を聞き、歌を歌い、楽器を演奏し、踊りを習う。

＊　日本語のクラスで学んだことを、時間を見つけて自分でやってみる（折り紙、日本の食べ物を食べる、ゲームをする、ままごとをする）。

＊　日本人の友だちをつくる。

8 年生の到達指標のサンプル

＊　自己成長や楽しみの目的で、日本語で書かれた本（児童向けの本、イラスト入りの本）を読んだり、メディア（ビデオ、コンピュータプログラム）を使ったりする。

＊　興味のあるトピックに関する情報を得るために、さまざまな日本語の情報を参考にする（児童向けの本、イラストつきの記事、ビデオ、知人）。

＊　日本文化に関係するスポーツやゲームをする（武道、コンピュータゲーム）。

＊　学習者がお互いにの興味あるトピックに関して、情報を交換する。

＊　日本の行事及び社会のアクティビティー（もちつき、花見、雪まつり）に参加する。あるいはメディアを通して観賞する。

＊　日本の音楽を聞き、歌を歌い、楽器を演奏し、あるいは踊りを習う。

＊　個人的興味のあるアクティビティー（日本料理を作る／日本食を食べる、プラモデル、習字、折り紙）に参加する。
＊　実際の、または想像上の、日本旅行プランを立てる（目的地、宿泊場所、日程及び日々のスケジュール、ホームステイの家族との交流）。
＊　日本人との個人的な交流関係を築き、またはそれを維持する。

12 年生の到達指標サンプル

＊　興味のあるトピックに関する情報を得るために、日本語のさまざまな資料（本、雑誌、ワールド・ワイド・ウェブ、フィルム、専門家）を参考にする。
＊　日本文化関連のスポーツやゲームをする（武道、将棋、碁）。
＊　自己成長や余暇を楽しむために、日本語で書かれた本（本、雑誌、マンガ）を読み、メディア（ビデオ、CD、ワールド・ワイド・ウェブ）を利用する。
＊　日本人と個人的な交流関係を樹立し、それを維持する。
＊　日本の行事及び社会のアクティビティーに参加する。あるいはメディアを通して観賞する（歌舞伎、祭り、学校の役割）。
＊　日本の音楽を聞き、歌を歌い、楽器を演奏し、あるいは踊りを習う。
＊　実際の、または想像上の、日本旅行プランを立てる（目的地、予算、日程及び日々のスケジュール、旅行社との交渉）。
＊　個人的興味のあるアクティビティーに参加する（料理を作る／日本食を食べる、手芸（crafts）、墨絵、習字、武道）。

16 年生（大学生）の到達指標サンプル

＊　興味のあるトピックに関する情報を得るために、日本語のさまざまな情報を参考にする（本、雑誌、新聞、百科事典及び参考書、ドキュメンタリー、フィルム、インターネット、専門家）。
＊　自己の成長のため、または余暇を楽しむために、日本語のメディアを読み、使用する。
＊　日本語で話したり、書いたりすることにより、個人的交流関係を確立し、それを持続させる。
＊　日本文化関連の行事及び社会活動（レセプション、コンパ、合コン、能、落語、コンサート、演劇 ）に参加する。あるいは、メディアを通して観賞する

学習シナリオ

赤い鳥　小鳥

ウォーターベリー小学校（Waterbury Elementary School）の幼稚園生はクラスで春祭りを行うことにする。FLES 日本語[訳注 11]のクラスでは「鳥」を課題にとりあげることにする。生徒たちは色とりどりの鳥を作って、この地域にいる鳥の名前を日本語で練習する。それから、「赤い鳥、小鳥」と「鳩ポッポ」の歌を、その絵を描きながら練習する。その学習成果のアクティビティーとして、学校の集会において、日本の歌を発表し、園児たちの描いた絵の展示を行う。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
1.2	解釈形態のコミュニケーション
1.3	発表形態のコミュニケーション
2.2	文化的所産・産物
3.1	コネクション
3.2	情報を得る
5.1	学校とコミュニティー
5.2	生涯学習

内省　（Reflection）

1.1　生徒は折り紙で鳥を作ったり、色をつけたりする時に、先生の日本語での指示に従う。分からない場合には質問する。

1.2　先生が口頭で描写するのを聞いて、日本とアメリカの鳥の名前を区別（identify）でき、色をぬることができる。

1.3　学校の集会における出演にそなえて、歌の発表及びポスターや絵の展示の準備をする。

2.2　折り紙で鳥を作る。

3.1　春の季節の概念と、他の科目で学習するさまざまな鳥の生活に関する知識を日本語の授業と結びつけて、補強する。

3.2　「赤い鳥、小鳥」の歌詞の語彙に色をぬりながら、発音する。語彙の意味について、先生が動作をしたり、絵を見せたりしながら日本語で説明する。それから、生徒たちは歌の意味全体について英語で質問したり答えたりして確認する。

5.1　学校の集会における歌の発表及び日本の歌の説明を準備する。

[訳注 11] Foreign Language for Elementary School の省略で、そのプログラムの 1 つに日本語が取り入れられている

5.2　生徒が家で折り紙を作って家族に教えられるように､折り紙と折り方の説明書を生徒に与える。

フード・ピラミット

マウント・ワシントン マグネットスクール（Mt. Washington Magnet School）では、３年生の学習カリキュラムの一部として栄養について学習することに決まった。その領域に関連させ、FLES日本語クラスでは、アメリカのフード・ピラミットを学習することにする。それに先だって、果物と野菜や好き嫌いに関する語彙の勉強をしておいた。フード・ピラミットの紹介にあたってまず店を作る。教室内に箱をいくつか置き、それにプラスチック・フード、空き缶、箱などの食品を、食品グループ別に分類して並べる。そこでクラスを小グループに分けて、買い物に行き、各グループで、どの食品が好きかを言い合う。ゲームやインタビュー、タスクをしていくうちに、その食品名を覚える。今度は、フード・ピラミットに焦点をあてて、国が奨励している摂取量を学ぶと同時に自分の食習慣をかえりみて、それを評価する。次に、豆腐やコンニャクなどの日本食品を調べ、それがどのグループに所属するかを決める。生徒たちはさらに、日本の食品分類とアメリカのフード・ピラミットとの類似点や相違点について、英語で話し合う。最後の活動として、各自が家族の１人にインタビューをして、その人の１日のメニューをクラスで発表する。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
1.2	解釈形態のコミュニケーション
1.3	発表形態のコミュニケーション
2.2	文化的所産・産物
3.1	コネクション
4.2	文化の比較

内省

1.1　アメリカのフード・ピラミットに関する情報を得たり､与えたりする。食べ物に対する好き嫌いを表現したり、自分の食習慣の健康度や栄養バランス度についても意見を述べたりする。

1.2　ピラミット内の食品グループ及び食品名の書かれた言葉を理解し、解釈する。

1.3　家族の１人についての食習慣に関するインタビュー結果を発表する。

2.2　日本の食品を見つけ、観察し、フード・ピラミット内のどの食品グループに所属するかについて話し合う。

3.1　食物、栄養、フード・ピラミットに関する知識を深め、補強する。

4.2　アメリカと日本のフード・ピラミットについて、類似点と相違点を比較対照する。

日本の家

サンタ・テレサ小学校（Santa Teresa Elementary School）の４年生は、典型的な日本の家屋の特徴、及び人の家を訪問する時の正しい礼儀について学習する。基本的な語彙すなわち、玄関、子供部屋、台所／キッチン、トイレ、たたみ、ふとん、ベッドなどを紹介するために、写真パネルを使う。生徒は英語で日本とアメリカの家の類似点と相違点、及び、日本で１つの家に洋風と和風の両方が存在することについて話し合う。それから、よその家を訪問するときの挨拶、別れに際しての挨拶、食前、食後の表現、お礼の言葉の述べ方などを復習する。子ども達が他人の家を訪問する内容のビデオを見たあと、先生が日本人をクラスに招き、招待する側の役をしてもらう。生徒たちは、これから日本人の家を訪問するという状況設定のもとでその役割を演ずる準備をする。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
2.1	文化的習慣
2.2	文化的所産・産物
4.1	言語の比較
4.2	文化の比較
5.1	学校とコミュニティー

内省

1.1　生徒が訪問時、別れ際、食前・食後、お礼などの挨拶をする。

2.1　ジェスチャー（gestures）をしながら、訪問時、別れ、食前・食後、お礼などの挨拶をする。

2.2　写真パネル及びビデオを見て、日本の家屋の部屋や物を観察して、それを理解する。それから訪問の場面で、生徒たちは実際に靴を脱いで、スリッパをはく経験をする。

4.1　日本語として使われているベッドやトイレは英語からの借用語であり、また、日本語からもフトンのように英語に取り入れられた語もあることを知る。

4.2　アメリカの家庭にある製品や品物が、日本の家にもあるのを見て、日本とアメリカはライフスタイルに共通点があることを認識する。

5.1　クラスに来られた日本人訪問客と交流する。

花見

インディアナ中学校（Indiana Middle School）の日本語クラスでは、先生の書いた「花見」という短い記事を読む。そのあとでクラスは、実際に花見会を催すことにする。クラスをグループに分けて、スカウト委員会、 招待委員会、記録委員会、食べ物委員会、カラオケ委員会、ゲーム委員会、

などの小委員会を作り、パーティーのことについて詳しく話し合う。花見会の前に、スカウト委員会は花見に最適な所を見つけて、場所のアナウンスメントを書く。そして、同委員会はパーティーの前日に大きい、赤いブランケットを敷いてその場所を確保する。招待委員会はコミュニティーの日本人に招待状を書く。そして、当日は同招待委員会がお客さんたちに挨拶をする。食べ物委員会は食べ物を配り、ゲーム委員会はゲームをリードする。 カラオケ委員は日本の歌を全員に歌わせる。記録委員は記録用に種々の写真を撮る。花見会が終了してから、各委員会の代表が集まり、楽しい写真を多く挿入した花見会に関するポスターを作成する。

学習基準スタンダード
1.1　インターパーソナル・コミュニケーション
1.2　解釈形態のコミュニケーション
1.3　発表形態のコミュニケーション
2.1　文化的習慣
2.2　文化的所産・産物
5.1　学校とコミュニティー
5.2　生涯学習

内省

1.1　花見会のプランを話し合う。小委員会でパーティーの詳細を話し合う。招待状を書き、日本人のお客さんと話す。

1.2　花見に関する記事を読む。

1.3　花見パーティーのアナウンスメントを書き、ポスターを作成して発表する。

2.1　日本のゲームや歌に参加する。

2.2　日本の食べ物を食べる。

5.1　コミュニティーの日本人を花見会に招待する。

5.2　カラオケで歌う。

台風

エジソン中学校（Edison Middle School）の生徒たちは地理のクラスで、竜巻き、吹雪、オーロラ、スコールなどに関する気象学を学んだ。日本語クラスでは日本における台風、津波、地震など自然界に起こる災害について学習することにした。この単元では、台風をテーマに取り上げる。生徒たちはグループに分かれて、ウェブページ、本、地図、日本人へのインタビューなど、いろいろな資料と方法を使って、次の事項を中心に調査を行う。１）台風はいつごろ日本にやってくるのか、２）どんなコースを辿るのか、３）台風襲来に対して日本人はどのような対策や準備をするのか、４）どの

ような被害をもたらすのか。それから生徒たちは、日本の台風による災害を、アメリカで起こる天災と比較する。最後に各グループとも調査結果を、映像媒体を使って口頭で発表する。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
1.2	解釈形態のコミュニケーション
1.3	発表形態のコミュニケーション
2.1	文化的習慣
3.1	コネクション
3.2	情報を得る
4.2	文化の比較
5.1	学校とコミュニティー

内省

1.1　生徒は台風及び他の天災について話し合い、台風の経験について日本人をインタビューする。

1.2　ウェブページ、新聞の天気予報、日本の地図帳を読んだり、ラジオやテレビで天気予報を聞く。

1.3　台風に関する調査結果を発表する。

2.1　日本人がいかにして台風に備えるかを学ぶ。

3.1　地理のクラスで学んだ知識を日本語クラスの活動を通して補強する。

3.2　ウェブページ、新聞、その他さまざまな日本語資料より情報を得る。

4.2　日本人とアメリカ人の天災に対する考え方や意見、反応などを比較する。

5.1　コミュニティーの日本人にインタビューしたり、電子メールで意見を交換したりする。

この学習活動は、地震や津波、火山噴火などを含めた大きな単元学習の一部とすることも可能である。あるいは、各グループが異なったタイプの天災について調査を行い、その結果をそれぞれ発表するというように取扱ってもよいと思う。

子供の童話プロジェクト

ウェスト高校（West High School）の生徒たちはグループで日本語の童話を書くことにした。まずはじめに、これまでに勉強した日本の代表的な子供の物語の本を調べる。次に、これから書こうとするプロジェクトがどのように評価されるかについて討議する。評価基準が決まったら、先学期学んだ家庭と家族、地域社会、職業などのテーマに、物語の筋を結びつけながらグループの皆でプランした本の内容がグループの共著になるように作業を進める。先生に提出する前に皆で原稿を推敲する。絵のイラストを付けて本を完成させてから、クラスの全員に大きな声で読みあげ、聞いてもらう。聞い

ている間、クラスはそれぞれの本の内容に関する質問に答えを書く。クラスでの発表がすむと、生徒たちは小学校の日本語クラスを訪問して、自分たちの創作した物語を読んで聞かせる。小学生に作品の写しもあげる。その後、生徒たちはプロジェクト評価表に、このプロジェクトで学んだこと、今後の童話プロジェクトを向上させるために必要な知識、前もって知っておくべきだったこと、その他の反省点などを書き入れて、先生に提出する。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
1.2	解釈形態のコミュニケーション
1.3	発表形態のコミュニケーション
2.1	文化的習慣
2.2	文化的所産・産物
3.2	情報を得る
4.1	言語の比較
4.2	文化の比較
5.1	学校とコミュニティー

内省

1.1　日本の童話の本について意見や感想を述べ合う。それから自分達の書いた本の内容や発表に関して質問したり、答えたりする。

1.2　日本のいろいろな童話の本を読む。それからクラスの仲間の書いた物語の発表を聞く。

1.3　グループで書いた童話の本をクラスで発表する。それから、小学校の日本語のクラスでも発表する。

2.1 & 2.2　物語のテーマは日本人であるかも知れないし、あるいは、外国人主人公の日本における生活に関するものかも知れない。いずれにしても、物語の内容、筋の運び、性格及び行動描写、状況設定、言葉づかいの選択などにも日本文化に対する理解と洞察力が発揮されるはずである。

3.2　日本の童話に関する内容の設定、言葉の使い方、テーマと主人公などについての情報を得る。子供のために書かれた本は、日本人一般向けに書かれた本と比べて、どこがどのように異なる

4.1　のかについて学ぶ。さらに童話に関する日米の類似点と相違点について学ぶ。

4.2　グループの選ぶ物語のトピックによって多少の違いはあるかも知れないが、日本とアメリカを比べることで、生徒たちは文化的な考え方や概念について一段と深く学ぶことが予想される。

5.1　自分達が書いた童話を発表するために、地域の小学校の日本語のクラスを訪問する。

トピックの内容が他の学科に関係したものであれば、スタンダード 3.1 （コネクション：他の学科と結びつけること）も含まれることになる。この学習シナリオのクラス活動は、最後の学期に取り上げると、これまで学習したことをすべて復習させる良い機会になる。自分たちが興味のあるトピックの分野に集中できるので、この活動は生徒たちに歓迎される。できあがった本を小学校で発表し共有

することで、生徒たちが具体的な達成感が味わえると同時に、日本語プログラムの存在をアピールすることにも一役買うことになる。

マンザナー（Manzanar）

ワシントン高校（Washington High School）の生徒たちは、日系アメリカ人と第２次世界大戦中の強制収容所（relocation camp） に関して知っていることを話し合う。その後で、アリゾナ州にあるマンザナー強制収容所について書かれた “Farewell to Manzanar”（『マンザナーよ さらば』）と題する本を読む。それから小グループに分かれ、その本を読んで非常に興味深かった点について日本語で話し合う。各グループとも、その本と他の学科（例えば、アメリカの歴史、政府、世界史など）で学んでいることに結びつけられ、しかも興味あるトピックを見つけ出す。トピックを見つけたら、インターネット、本、その他の資料を使ってリサーチをする。コミュニティーに日系人やトピックに詳しい人が住んで居られたら、クラスに招いて話を伺ったり、あるいは生徒たちが出かけて行ってインタビューをする。リサーチが終わったら、グループは他の生徒たちに調査結果を発表するための準備をする。発表後、全員のリサーチ結果をまとめて調査情報として、地域の関係組織（日米協会、日本語教師会、教師用資料センターなど）に提供する。

学習基準スタンダード
1.1　インターパーソナル・コミュニケーション
1.3　発表形態のコミュニケーション
3.1　コネクション
4.2　文化の比較
5.1　学校とコミュニティー

内省

1.1　小グループ内で日本語でディスカッションする。

1.3　リサーチ結果を書いてレポートにまとめる。それをクラスで口頭で発表し合う。それから、クラスの調査結果をまとめて地域の組織宛てに送付する。

3.1　日系アメリカ人と他の学科領域に関連したトピックについてリサーチをする。

4.1　日本とアメリカの文化を比較し、日系アメリカ人が第２次世界大戦中いかにしてその両方の文化を、葛藤と煩もんと闘いながら保持したのかということについて考えてみる。

5.1　地域社会の方々と連絡を取って、クラス全員による調査結果の報告書を関係団体に提供する。

日本人をもてなす

サウス高校（South High School）の生徒たちは学校に訪問予定の日本人を迎えるプランを立てることになった。生徒たちは先ず、訪問客の紹介及び訪問に際しての質問などに関する電子メールを読む。それから、皆でその質問事項について話し合ってから、返事を書く。その返事のメールには、来校を皆で歓迎すること、質問に対する答、それから、いっしょに何かアクティビティーを準備するので、訪問される方々の興味や好きな食べ物を知らせてほしいということを書く。訪問客からの返事が届き、生徒たちは歓迎の意を伝えるために日本の文化や習慣に関する知識を駆使してプランを練る。例えば、クラスからの「寄せ書き」、あるいは学校の特別な記念品を送ることが考えられる。食べ物は何を準備したらいいだろうか。ある生徒はクラスで習った日本食を作ろうと考える。またある生徒は日本人がピクニック、バーベキュー、ディナーパーティーなどにおいて好きなアメリカの食べ物がいいと思う。訪問客一行が学校に着くと、まず日本語で最初の説明会を行う。説明には視覚資料を使って、学校についての情報やいっしょに行う活動に関する詳細も含める。説明会が済むと、生徒たちは計画に沿って、日本人のお客様のおもてなしをする。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
1.2	解釈形態のコミュニケーション
1.3	発表形態のコミュニケーション
2.1	文化的習慣
3.2	文化的所産・産物
5.1	学校とコミュニティー
5.2	生涯学習

内省

1.1　生徒は小グループで計画について話し合い、最初の電子メールに返事を書く。訪問客と日本語で話し合う。

1.2　日本語のファックスを読んで解釈する。

1.3　日本語で説明会を開く。

2.1　日本の習慣を考え、訪問客との交流会に寄せ書きを書いて送る計画をする。

2.2　日本の色紙や特別な日本の食べ物について学ぶ。

5.1　学校の外からいらした日本人と交流する。

5.2　お客さまのために日本食を料理する。

学習目的としてスタンダード 4.1（言語の比較）も含められる可能性がある。つまり、日本語で手紙やファックスを書く時のしきたりを学ぶことである。実際に学校に訪問してくれる客がいない場合

には、先生が想像上の訪問者として電子メールを書き、学校への訪問客をロールプレイで行う方法に変える。もし訪問客がひとりだけの場合には、小グループに分けて、それぞれが、客の質問に答え、交流計画を立てる。その中で一番いい計画を、皆の投票によって選ぶ。

“街角 ” のインタビュー

大学生のクラスでは日本の教育制度についての記事を読み、日本と自国における教育制度を比較する討論を行う。討論に続いて、グループを作り、日本の教育の興味ある分野について質問リストを作成の上、インタビュー調査を行うことにした。学生たちは、知らない人にアプローチするため敬語を使い、会話をかわし、それからインタビュー・プロジェクトに参加してくれるようにお願いする方法を学ぶ。このインタビューの進め方を練習してから、学生たちはキャンパスの中で、またはコミュニティーに出かけて行って、賛同してくれた人たちにインタビュー調査を実施する。その後インタビューの結果のまとめ方を学び、その調査結果をクラスのメンバー、インタビューに参加してくれた方々、あるいはコミュニティーから招待したゲストに発表する。発表に続いて質問を受けたり、答えたり、討論したりする。学生たちは調査結果、その結果から学んだこと、それに対する感想などを記録する。その記事や記録をニュースレターかパンフレットにして、キャンパスや他の適当なところ（例えば、学生組合、海外留学事務所、アジア学生協会など）に配布する。

学習基準スタンダード	
1.1	インターパーソナル・コミュニケーション
1.2	解釈のコミュニケーション
1.3	発表のコミュニケーション
2.1	文化的習慣
3.2	情報を得る
4.1	言語の比較
4.2	文化の比較
5.1	学校とコミュニティー

内省

1.1 日本と他の国における教育制度について討論をし、日本の教育について日本人にインタビューする。

1.2 日本の教育制度に関する記事を読む。

1.3 インタビュー調査の結果を発表し、その結果の要約記事を書き、ニュースレターかパンフレットを作成する。

2.1 日本の教育制度について学ぶ。

3.2　日本人から情報を得る。
4.1　初対面の方に話す時に使う敬語について分析する。
4.2　日本の教育制度を自分の国のそれと比較する。
5.1　日本人にインタビューし、調査結果を記事にしたニュースレターかパンフレットをコミュニティーに配付する。

似たような学習活動は教育以外のトピックでも実践できる。例えば、環境問題、社会的または政治的な問題を取り上げてもいい。インタビューの方法は個人、電話、電子メールなど、その地域の日本人の状況に応じて柔軟に対応した方がよいと思われる。

お茶

アリゾナ大学の日本語クラスでは「お茶」の単元について学習する。学生はリサーチ・プロジェクトのグループを作り、お茶はいつ、どのようにして日本に紹介されたのか、お茶と日本の芸術、建築、哲学、宗教との関係、日本史におけるお茶の演じた役割、そして現在お茶は日本の生活においてどのような役割を果たしているのかなどのトピックについて調査する。日本語及び英語の資料、日本領事館から借りてきたビデオ、コミュニティー在住の日本人へのインタビュー、手紙や電子メールで入手したペンパルからの情報など、さまざまな研究資料を使用する。学生は調査結果を日本語で発表し、質疑応答をする。それから、日本以外の国々で人々はどのような種類のお茶を飲み、その役割について、さらにお茶の健康上の貢献についても討論する。

最後に学生はその諸報告を記録して、小冊子を作成する。

学習基準スタンダード
1.1　インターパーソナル・コミュニケーション
1.2　解釈のコミュニケーション
1.3　発表のコミュニケーション
2.1　文化的習慣
2.2　文化的所産・産物
3.1　コネクション
3.2　情報を得る
4.2　文化の比較
5.1　学校とコミュニティー

内省

1.1　日本人にインタビューしたり、電子メールを書いたりする。グループで調査結果を話し合い、発表の準備をする。

1.2　お茶に関する資料を読み、ビデオを見る。

1.3　調査結果を口頭で発表し、記録してパンフレットを作成する。

2.1　日本におけるお茶の習慣について学ぶ。

2.2　日本人の持つお茶と文化的な背景との関連を学び理解する。

3.1　日本語の学習を建築学、芸術、哲学、歴史など他の学科と結びつける。

3.2　発表の準備をするのに、日本語のさまざまな資料を使用する。

4.2　世界中のさまざまな地域におけるお茶を飲む習慣を比較する。

5.1　お茶について学校以外の日本人と口頭で、または文章に書いて、コミュニケーションを行う。

この学習シナリオは内容関連言語学習（content-related language learning）の基本として使用できる。リサーチや討論のトピックは、伝統的な古い時代から現代の新しい社会までを含め、日本研究に対する大学生の興味を刺激し、知的チャレンジを引き起こすようなものでありたい。似たような学習シナリオは日本の文化的産物である「米」や「紙」を中心にしたデザインでも可能である。

贈り物／テレフォン・ショッピング

カリフォルニア州立大学の日本語クラスの学生は、日本における贈り物の習慣に関する記事を日本語と英語で読む。学生は伝統的な、お中元、お歳暮、包装、のし紙、お返しなどの概念について学ぶ。それから日本のデパートでお中元とお歳暮の贈り物特集のカタログを調べる。日本の社会におけるお中元とお歳暮の役割、贈り物を送る側と送られる側の上下関係により、どのような品物が贈り物として選ばれるのか、という点について討論する。それから、自分たちの国ではどのような場合に贈り物をするのか（結婚式、入学式など）、また贈り物にかける値段などについて、日本の習慣と比べてみる。

そのあとで、学生は友だち、同僚、上司、先生に相手との関係、相手の好み、その他の要素によって贈る品物を決めて、注文書にそれを書き入れる。あるいはその品物を電話で注文するロールプレーをする。最後の活動として、贈り物をもらったときのための礼状を書く練習をする。

学習基準スタンダード
1.1　インターパーソナル・コミュニケーション 1.2　解釈のコミュニケーション 2.1　文化的習慣 2.2　文化的所産・産物 4.2　文化の比較

内省

1.1　日本と自分の国における贈り物の習慣について話し合い、電話で送り物用の品物を注文する。
　　また、礼状を書く。

1.2　日本における送り物の習慣に関する記事を読み、日本のデパートのギフト・カタログを調べる。

2.1　日本における送り物の習慣に関する記事を読み、討論する。

2.2　日本において送り物に用いられる一般的な品物について学ぶ。

4.2　日本における送り物の習慣と自分の国のそれとを比較する。

日本における送り物の習慣を中心テーマにして、学生は買い物や注文など日常の基本的な生活活動に関するさまざまな文化的側面を学ぶことができる。

日本の習慣、日本における人間関係、日本の文化と自国の文化の比較に関する討論などを行う際に、生教材の使用は効果的なきっかけづくりをしてくれる。教師にとって、この学習活動は討論する内容やスピーキング、リーディング、ライティングのレベルを調整することで、容易に高校生にも応用することができる。